

衣

名古屋帽子協同組合

麦わら帽子と布製帽子

二つの流れ

農家の副業として始まった麦わら帽子

烏帽子、綿帽子など、日本にも古くから帽子という言葉はありました。しかし多くの人が思い起こすのはハット、キャップといった西洋の帽子です。

日本の帽子の歴史は、明治になって軍人や警察官、学生が布製の帽子（布帛帽子）をかぶるようになった時から始まったと言われてます。こうした帽子は制服と一緒に用いられ、いわば、その人の職種や身分を表現するものでした。

一方、身分に関係なく、多くの人に用いられたのが農家で作られていた麦わら帽子です。名古屋帽子協同組合は、明治25年（1892）に設立された愛知県麦稈真田同業組合から始まります。

その後、日本の帽子は、麦わら帽子と布帛帽子の二つが主流となりました。麦わら帽子は麦わらを平たい紐状にしたもの、布帛帽子は中古の軍服やマントを材料にしたものが使われ、製造方法も異なっていました。

やがて、麦わら帽子と布帛帽子の両方をつくる人が増えていき、麦稈真田、布帛、帽子卸商の三組合



様々なデザインの帽子

が一つになって、名古屋帽子協同組合となりました。

天候が売り上げを左右する大きな要因

全国の帽子出荷額は平成11年（1999）ころをピークに、年々低下傾向を示しています。さらに、近年になって中国からの輸入が大きく伸びていますが、日本製は価格よりも品質やデザイン性の良さで対抗しているため、将来的にも十分太刀打ちできるといえます。

帽子の売り上げは夏の暑さや冬の寒さに影響を受けるほか、映画やドラマなど、ちょっとしたことがきっかけでブームとなることもあります。また、帽子以外にマフラー、手袋なども扱っているため、業界全体として売り上げが大きく減少しているということはありません。

組合では以前から語呂合わせで8月10日を「ハットの日」としてPRをしてきました。最近の傾向で、5月のゴールデンウィークころの売り上げが伸びてきており、4月20日ころから5月の母の日までを「帽子週間」として取組んでいます。産学協同のファッションショーも行い、人気となっています。



帽子づくりには機械化が難しい部分もある